



『祖先を敬い 祖先にならう』

七月、お盆がやってくる。というよりご先祖様が帰郷される。久かたぶりに帰ってこられる。なんとなくそわそわしたり、うきうきしたり、緊張もしたり…。

キュウリやナスの馬や牛を見るにつけて、ほのぼのとした気持ちにさせてもらえる。「キュウリの馬は中央に向けて、ナスの牛は外に向けて置くのだよ。あの世から早く来て頂きたいから馬、帰るときはおなごり惜しいから牛でゆっくり帰って頂くのだよ。」また逆のお説もある。「お迎えの時は久しぶりだからゆっくりと物見遊山、見送りの時はなごり惜しいからこそギリギリまでお引き留めして早馬をつかって帰って頂く。」と。あるいは、ご先祖様は馬に乗り、おみやげの供物は牛に乗せてと諸説ある。いずれにしてもころがなごむすてきな風習である。ほのぼのとしてころがなごむから千何百年も（推古天皇のころから）伝え継がれたのだろう。お盆はある意味では、過去と未来のいのちのつながりを感じていのちの祭典でもある。分断された個々のいのちとしか受け取れない人には先祖も子孫もへったくれもないのかも知れない。となれば、牛や馬を見てもほのぼのとしない、そんな人たちが増えてきたような気もする。

ご先祖様が帰ってこられる証拠は無い。証拠なんていない。証拠なんかなくともころが安らぐ。宗教とはそういうものだと思う。目に見えるものより、目には見えないものを大切にしてきた祖先に習った生き方をしたい。そしてそれを伝えていかねば…。そうすればきっとひとびとのころも、自然も地球もいのちもいやされるにちがいない。